

# POLE

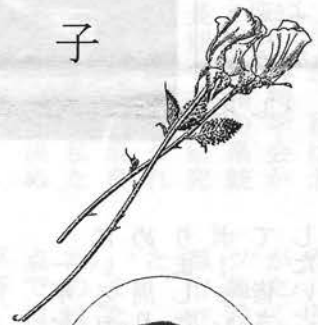
北海道ポーランド文化協会誌「ポーレ」  
第 51 号 2002.9.10

発行  
北海道ポーランド文化協会  
〒060-0052  
札幌市中央区南2東2  
河合楽器製作所北海道支社  
電話 011-231-8661  
FAX 011-221-4936

リレーエッセイ

## ポーランド滞在記

柏倉 涼子



二〇〇〇年八月末から一年間、語学コースに通いながらチェンストホヴァで生活をしました。私にとって  
は三度目の訪問で、念願の長期滞在。周りのみんなに助けられながら、笑いあり涙ありのあつと言う間の一年間でした。

### 学校生活

ヤスナグラのすぐ近くにある大学のポーランド語コースに在籍していました。最初の一ヶ月間、初級コースでは朝八時四五分から二時半まで休み時間も含めてポーランド語漬けの毎日。金曜日ごとにあるテストの為に勉強強しました。そのおかげか難解な文法も少しずつ理解できるよう



ポーランド語のクラス。左端が先生。とても近代的な建物の学校でした。

うになり、札幌のポーランド語講座で学んだ知識がようやくつながった感じがしました。そして何より周りがみんなポーランド人という環境でしたので、まさしく生きたポーランド語を身近で学ぶことが出来ました。

中級コースになってからは、アンジェイキ、クリスマス、復活祭と

いったパーティが催されたり、クラクフやカルヴァリア・ゼブジドフスカへの日帰り旅行などもありました。生徒の数も少なかったのもあって、クラスはいつもアットホー

ムな雰囲気でした。

### 人々の生活

私が始めてポーランドを訪れた時とは比べ物にならないほど生活は豊かでモノがあふれ、外国資本のスーパーマーケットがいくつもありました。それでも私は自分では『闇市場』と呼んでいた(チェンストホヴァの皆さん、ごめんなさい!)青空市場で新鮮な野菜や果物、パン、卵を買うのが楽しくて毎日のようにぶらついていました。なかでもポンチュキ(ドーナツ)とロデイ(アイス)が大好きな私は、チェンストホヴァ一美味しくて安い(これがポイント!)店を探そうとあちこちで食べ歩いたりもしました。

ポーランドではよくお花をプレゼントする習慣があるので、あちこちに花屋さんがあります。比較的安価

な花束も用意されているので、ちよつとしたお札に利用していました。ところが、違う町に住む方へお花を贈ろうと思っても、そういうサービスはやっていないとあっさり断られ、がっかりした記憶があります。チェンストホヴァでも男性が一輪の花を持って歩く姿をよく目にしました。これからきつと奥さんや彼女にプレゼントするんだらうなと思うととてもほほえましかったです。

### おまわりさんに…

それはあたりも薄暗くなりかけた大通りでのことでした。買い物帰りで疲れていた私は思わず目の前の信号を無視しました。すると左前方に二人の警察官がいるではありませんか。私は目を合わせないようにうつむき加減でその横を通り過ぎようとしてしまいましたが、そのうちの一人にこう話しかけられました。

「パニ（あなた）、今、赤信号を渡りましたね」

「ハイ…」

帽子とマフラーの隙間から覗く私の顔を見るや否や、

「世界中の一体どこで、赤信号で渡っていいところなんてあるんですか？」

「いいえ、ありません…」



ヤスナグラと大勢のシスター達、そして日本の私という不思議な組み合わせが、ポーランド人には逆に好評でした。



幼稚園で、日本の日というイベントがあり、大歓迎にうれしような照れくさいような。

それからは矢継ぎ早に質問の嵐！「どこから来たんですか？」「どこで何をしているんですか？」「どこに住んでいるんですか？」「住居登録をしていますか？」「パスポートを持っていますか？」

すでに私の頭の中では「罰金」の二文字ばかりが行ったり来たりしていました。さらに、しやべり続ける彼の一番最後に言ったことの意味がわからず、正直に「わかりません」と言うと、今度は「何てことだ、こ

こまでできて分かりませんとは一体どういうことなんだ！」と半分あきれられてしまいました。ああ、もうだめだ。下手したら警察署でも連れて行かれるのでは…と思い始めた時、警官は顔を見合わせてまたアードのコーダの言い、最後に「パニ、これからは赤信号を渡ってはいけませんよ。ドブラーノッツ（おやすみなさい）」

え？助かったの？「ドブラーノッツ！」やったく、お咎め無し！

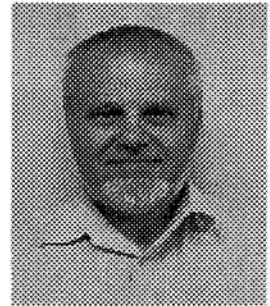
ところが狭いチェンストホヴァのこと。翌日、友人から電話が来て、「リヨウコ、警察から連絡が来たんだけど…」「え、警察？なんで知ってるの？」と驚くと、友人は笑って、「それは冗談だよ。でも昨日、友達が日本人の女の子が警察に色々聞かれていたのを見たつて言うからもしかしてと思って」

はい、その通り、それは私でした！

一年を通じて、チェンストホヴァにいる私のポーランドの家族を含め、周りの方々には大変お世話になりました。これからは私が少しでもポーランドと日本の架け橋になって、皆さんに恩返しできるよう努力したいと思っています。

# ポーランドと似た 北海道の森や動物

スワヴオミル・マズール



私は、スワヴオミル・マズールと申します。ポーランドのワルシャワ農業大学林学部に勤めて三十年以上になります。現在、私はこの学部の教授であると同時に、森林保護・生態学の学科長でもあります。この学科では、私を含めた研究チームがポーランドの昆虫についてあらゆる観点から研究しています。とくに、森林生態系における昆虫の役割に注目しています。

ずいぶん前に私は、世界中に分布する甲虫の一種、エンマムシ類についての研究を始めました。その研究はやはり森林と関連しています。とくに、樹皮の下に生息している種に関心があります。この種は、ヒメナガエンマムシ族と呼ばれるのですが、これこそが北大の大原昌宏先生と私たちとの共同研究のテーマなのです。私たちは何年も前に、お互いのことを知り、手紙や学術論文を交

わしたり、話し合ったりしてきました。そして三年前、ポーランドと日本の学術協定の支援を受けて、大原先生がポーランドを訪れました。これが、私たちの共同作業の転機になりました。強力になった研究体制と大原先生の聡明なる力のおかげで、樹皮下生活をするエンマムシ類に関して、三部から成る論文を出版できました。

私が札幌へやってきたのは、この研究計画の続きです。大原先生がおられる北大総合博物館は、仕事を進める上で絶好の環境ですから、大変うれしく思っています。妻のクリステーナと私は、日本の美しさに深く魅了されました。すべてが日本の文化と結びついていますが、なによりも人々と結びついてるのがわかります。

実は、私たちの日本訪問はこれが最初ではありません（最初の来日は

一九九九年八月）。二年前、私は北京の中国科学アカデミー動物学会から招請を受け、中国の動物相の系統発生と起源について長期の共同研究を行なうために赴きました。それが、日本の友人たちと出会える最良の機会になりました。それで、私たちの旅を日本まで拡張しようと思つたわけです。

なんと素晴らしい時を過ごしたことでしょうか。私たちは奈良、大阪、京都の周辺など、最も古くて美しい土地を旅しました。それは忘れ難い体験です。日本の歴史を生み出した場所のすべてを、この目で見る事ができるなんて！ とても豊かで長い歴史です。人類の歴史がヨーロッパに限られたものでないこと、この世界が様々な文化、宗教、文明によって生み出されたものであることを知るのには、とても大切です。

それから、新幹線で東京まで快速の旅をしました。東京は京都とはまったく違う都市ですが、やはり驚くことばかりで、変化に満ちています。

これが、私の最初の「日本の感触」でした。話を札幌に戻します。最初に札幌に着いたとき、奈良や京都のような場所が見当たらないことを不思議に思いました。しかし、それは第一印象にすぎませんでし

た。長く滞在すればするほど、札幌がたくさんの公園、美術館、スポーツ施設などを備えたモダンで快適な都市であることがわかってきました。

また、北海道を訪れてみて気づいたのは、ポーランドの自然と多くの点で似ていることです。それは山、平野、川などです。とくに、森林学者としての私には、ポーランドと同じ形をした森や林や動物たちと出会うのが驚きでした。北海道の自然は、どんなに原始的な豊かさをたたえているのでしょうか。

それとは全く別の話題ですが、札幌に大きなポーランド人コミュニティがあることは私たちにとても驚きでした。十五人以上ものポーランド人がここに定住しているのです。毎週水曜日、私たちは会って話をし、新しい知らせや本のことや、感じていることを話し合います。なんと驚くことに、流暢にポーランド語を話す日本人数人にも会いました。

こんなわけで、妻も私も、札幌に来てとても幸せです。日本の科学者たちと共同作業できるのはもちろんですが、なによりも日本を深く見ることができのうれしく思います。（\*マズール先生は二〇〇三年一月まで滞在予定です）



# シヨパンの「名の日」



三浦洋

ポーランドの人々は、自分の誕生日とは別に、「名の日」を暦の上に持っています。例えば、日本人にもなじみが深い「ヴァレンタインデー」の二月十四日は、もともとキリスト教の世界で聖人ヴァレンタインを記念する日。この日、ヴァレンタインという名を持つポーランド人男性は、家族や友人たちとパーティーを開くなどして祝います。もう一つ例をあげましょう。世界史の教科書に出てくる「聖バルテルミーの大虐殺」は昔、フランスで八月二十四日に起こった大事件。この日は聖人バルテルミーの日で、ポーランドならバルトウオミエイという名の男性がお祝いする日です。もちろん女性にも「名の日」があり、例えば一月一日はブリギッダ、一月二日はマリアの日、といったふうです。一年のす

べての日に対応する聖人がいて、ポーランドのカレンダーにはその名が日ごとに記されています。日本語では「聖名祝日」と呼ばれることもあります。

別の言い方をすれば、それだけポーランド人の名前が聖人にちなんで名づけられているということですから。誕生日に祝うのは幼少期だけで、大人になるにつれ、「名の日」に祝うようになるのが普通だそうです。この習慣はシヨパンの時代にもありました。では、シヨパンの「名の日」は……。

## 三月五日にお祝い

シヨパンの名はフリデリクで、三月五日を「名の日」として祝っていました。実は、同一の聖人に対し複数の「名の日」があり、フリデリク

の日は三月五日の他に十月六日があります。しかし、シヨパンは誕生日が三月一日なので、それに近い方を

Poniedziałek	Wtorek	Środa
4 Kazimierza, Lucji	5 Adriana, Fryderyka	6 Róży, Wiktora
11 Konstantego, Ludoslawa	12 Bernarda, Józefiny	13 Krysliny, Bożeny

ポーランドの3月のカレンダー。「フレデリク」が記されている5日がシヨパンの「名の日」

選んだと考えられます。このような「名の日」の選択の仕方は、今でも一般的だそうです。

ここで、シヨパンの母親ユステイーナが、パリに行ってしまったフリデリクに宛てて書いた手紙の一節を紹介しましょう。

「もうすぐ、三月一日と五日です。それなのに、あなたのことを抱きしめられません。……神様があなたを見守り、できるだけの祝福を与えてくださいますよう」(一八三七年二月末)

このようにシヨパンの誕生日と命名日ははっきりと記されています。父親のニコワイに比べ、ユステイーナがシヨパンに宛てた手紙は多くありませんが、毎年二月になると便りを送ったのは、「もうすぐ、三月一日と五日です」という一言を最愛の息子に書かないではいられなかったからでしょう。姉のルドヴィカも次のように手紙に書いています。

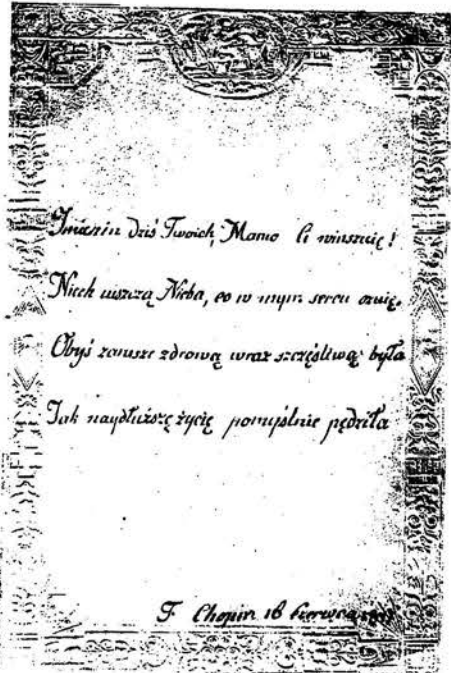
「三月一日と五日のよき日に、私たちがお祈りを捧げたことをお知らせするだけにします……」(一八四二年三月二二日付)

かつて、シヨパン研究に取り組んだ日本人には「三月五日」がなかなか理解できませんでした。英国の

シヨパン研究者アーサー・ヘドリーが文字通り英語で「ネーム・デー」と表現したために、ポーランドの習慣を知らない人々が誤解しがちでした。三月一日に生まれたシヨパンが五日にフリデリクと命名されたのだ、だからその日を祝うのだ、というふうに勘違いしたのです。シヨパンの名は、三月五日にちなんでというよりも、ミコワイを雇ったジェラゾヴァ・ヴォーラの領主、フリデリク・スカルベック伯爵にあやかっけてつけられたものです。教会の洗礼証明書によれば、伯爵夫妻がシヨパンのゴッドペアレント（名づけ親）



シヨパンが父・ミコワイの「名の日」に贈ったカード



シヨパンが母・ユステイーナの「名の日」に贈ったカード

ということになっています。

伯爵の子息も同名のフリデリクで、二月二十二日が誕生日。シヨパンの洗礼証明書に「二月二十二日午後六時誕生」と記されているのは、ミコワイが誕生日まであやかっけて申告したからでしょう。かっけてポーランドでシヨパンの誕生日が二月二十二日と信じられていたのは、そのせい

です。ユステイーナはスカルベック家の遠縁にあたりますので、三月五日をフリデリク・スカルベックの名の日としても記憶し続けていたにちがいありません。ちなみに、シヨパンの

周辺には「フリデリク」という名を持つ人が他に二人います。ルドヴィカの息子（つまりシヨパンの甥）と、シヨパンの親友テイトウス・ヴオイチェホフスキの息子です。言うまでもなく、シヨパンの名にあやかっけて命名されたのです。この人たちは三月五日か十月六日に祝っていたにちがいありません。

### 両親にメッセージ

さて、シヨパンはポーランドにいた頃、両親の名の日にお祝いのカードを贈りました。今も保存されているのが一八一六年十二月六日、ミコ

ワイに贈ったものと、一八一七年六月十六日、ユステイーナに贈ったものです。後者は次のような文面です。

「ママ、今日の名の日にお祝いします

僕が心の中で思っていることを、天はかなえたまえ

いつもママが健やかで、幸せでありますよう

そして、円満に長生きしましょう」

たった四行ですが、原文のポーランド語では韻が踏まれ、古典詩の形式を持つています。ミコワイに宛てた六行のメッセージでもやはり韻が踏まれています。シヨパンが当時、まだ六、七歳の少年だったことを考えると、毎年、文面を変えて詩のようなメッセージを書いていたことに驚かされます。ただし一八一八年になると、散文で「パパに対する僕の思いは、音楽で表すほうが易しいのです」と書いています。さらに一八二四年のミコワイの名の日には、シヨパンと三人の姉妹とで喜劇を創作し、演じたと伝えられています。早熟な子供たちの様子を伝えるエピソードです。

# ポーランド時代のショパンとその作品

作品数曲について解説と演奏

- ◆ 2002年9月28日(土)15:00～  
北海道立近代美術館ロビー (中央区北1条西17丁目)  
地下鉄東西線西18丁目駅下車 4番出口から徒歩5分
- ◆ 入場 無料 詳細は同封のチラシをご覧ください。



## 10月4日に総会

今回は4日(金)午後6時30分より、  
かでの2・7(中央区北2西7)940会議室で開催されます。

総会 午後6時30分より

懇親会 午後7時より。

在札ポーランド人をご招待します。

また、いくつかの話題提供も計画しています。

会費 2千円(軽食・ドリンク付)

※ ご出席は同封のハガキで早めにお知らせ下さい。

※ご欠席なされる場合は同封ハガキの委任状部分にご記入の上、  
必ず投函下さいますようお願いいたします。

## 投稿募集中

本誌「ポーレ」では随時、  
原稿を募集しています。

投稿要領は次の通りです。

- <投稿資格> 原則として北海道ポーランド文化協会会員。
- <内容> ポーランドの文化に関する事柄、あるいはポーランドと北海道、日本の交流に関する内容。
- <分量> 和文で1500～2000字を標準とします。写真や図表などの添付もできます。ポーランド語、英語など外国語の文書を投稿される場合は、「ポーレ」編集委員会にご相談ください。
- <投稿宛先> 下記の連絡先(小笠原)にお問い合わせください。Eメールでの投稿も可能ですのでお申し出下さい。掲載時期は「ポーレ」編集委員会が決定します。

## 会費の納入はお済みですか？

(2002年10月～2003年9月分)

当会は、皆様からの年会費によって運営されています。  
上記の年度分の会費の納入を宜しくお願いいたします。

《会費振込銀行口座》  
北洋銀行 大通支店  
(普) 301-0605084  
北海道ポーランド文化協会  
事務局長小笠原正明

《郵便振替口座》  
02740-5-19735  
北海道ポーランド文化協会  
普通会員(年額) 3,000円  
維持会員(年額1口) 5,000円

「ポーレ」編集委員会  
安藤むつみ・小笠原正明  
柏倉涼子・小林美保  
佐光伸一・三浦洋

FAX ☎ 011-386-3405  
011-387-9016

(連絡先) 小笠原

POLE 第 51 号(2002.9.10)目次

柏倉涼子「ポーランド滞在記」	1
スワヴォミル・マズール「ポニランドと似た北海道の森や動物」	3
三浦洋「ショバンと名の日〈上〉」	5
〈第 45 回例会〉解説と演奏「ポーランド時代のショバンとその作品」(道立近代美術館、2002.9.28)、第 16 回総会・懇親会(2002.10.4)のお知らせ	6